乗馬体験

医学部とモンゴル健康科学大学の学術交流

── 2006年度夏期モンゴル交流プログラム報告 ──

モンゴル健康科学大学

ウランバートル市街

モンゴル健康科学大学における調印式:
日本国徳島大学医学部と
モンゴ ル国モンゴル健康科学大学との間の
学術交流に関する協定[2005年6月6日]

交流のきっかけ

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長
[前医学部長]
曽根 三郎 そね さぶろう

外国大学との交流のきっかけは、そもそもが個人のお付き合いから発展することが多い。

モンゴル健康科学大学(HSUM)との縁は、内科の谷憲治助教授が米国NIH留学時にモンゴル出身のBiragyn博士と柔道、研究でご一緒した事がきっかけとなっております。彼の妹Yanjimaa医師を2000年に受け入れ、博士号取得後、2004年夏に私と谷助教授がHSUMを訪問した際、Lkhagvasuren学長、日本通のAltaisaisaikhan医学部長(島根医大留学)から大歓迎を受け、HSUMの卒業生に日本の先端医学を勉強させたいとの要望を出されました。2005年の夏に始めて医学部から4名の教授が表敬訪問し、第一回HSUMと当医学部との合同シンポが開催され、2大学間交流協定が締結されて以後、学長自ら選考したやる気満々の留学生を推薦して頂き、この2年間で10名を受け入れ、多くは大学院に進み頑張っております。2006年度は、島田光生教授を団長に、情熱のある医学生達も加わり、2大学間交流が活発にかつ盛大に行われました。

大学間交流を発展させるには、国を超えての人との出会いを大切にし、個人レベルの努力と情熱が必須と思われます。今後とも、学術交流を通して両大学が発展することを祈念しております。

コーディネーターとして参加して

医学部長補佐
村澤 普恵 むらさわ ふみえ

学長表敬訪問・島田団長挨拶

2006年7月22日から28日の日程で、本学医学部とモンゴル健康科学大学(以下HSUM)との夏期交流プログラムがモンゴルで開催され、私は、コーディネーターとして参加しました。

プログラムは、学長表敬、学長主催のタ食会、そしてキャンプ場での2泊3日を除いては、先生方と学生の活動が別行動となるように作成しました。

これは、両校の学生の皆さんが、学生同士で少しでも多くの時間を共に過ごし、相互理解を深め、本学とHSUMの将来を見据えた更なる交流の基礎を築くことが、このたびの大きな目的のひとつであったからです。学生の皆さんは、学生主催のシンポジウムや文化交流、そして寮での共同生活等を通してその目的を立派に果たし、将来に向けての大きな礎を築かれたと思います。

学長表敬訪問・学長を囲んで

一方、先生方は、学術シンポジウムでは、それぞれの専門分野での最先端の医療についてプレゼンテーションをされ、また、HSUMのファカルティと今後の共同研究や相互交流のあり方についてのミーティングを連日持たれました。

私は昨年に続いて二度目のHSUM訪問でした。今回、様々なプログラムを通してHSUMの学長、副学長、医学部長、そして学生の皆さんらと交流を深めることができたことは私にとりましても一生の思い出となる貴重な経験でした。このような交流プログラムにコーディネーターとして参加できたことを心より感謝致しております。

モンゴルと学術交流2006

2006年夏期交流プログラム 団長
大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
臓器病態外科学分野
(医学系)
島田 光生 しまだ みつお

今回のモンゴル健康科学大学との医学生交流プログラムの3つのミッションについての成果を報告いたします。

1 将来につながる医学生交流プログラムの基盤形成

参加応募者8人中から面接にて選抜した精鋭の6人の学生に、徳島、徳島大学、医学教育システムのことなどのテーマについてプレゼンテーションと、日本とモンゴルでの医学教育の違いを体感したレポート提出を課しました。ただ大いにモンゴルを楽しみ、心から友人としてモンゴル健康科学大学の学生達と接することを最重要課題としました。彼らは自分達のプレゼンテーション、モンゴル健康科学大学の医学生との心からの交流、モンゴルの満喫が120%でき、今後の医学生交流プログラムの基盤形成は十分遂行できたと感じています。

サマーハウスでの親睦会・
学長と副学長を囲んで

2 徳島大学とモンゴル健康科学大学との学術交流の発展

小生の他、金山教授、苛原教授、谷助教授が参加され、消化器外科領域の癌研究の共同研究、泌尿器科、産婦人科、膠原病内科領域の診断・治療の共同研究や人事交流を含む交流計画などの基盤作成が達成できました。さらに歯学部の西野名誉教授が今年から2年間モンゴル健康科学大学で、小児歯科を中心としたデンタルヘルスの発展に尽力されており、徳島大学とモンゴル健康科学大学との学術交流は益々発展するものと思われます。

3 医学部と学生のグローバリゼーション

学術シンポジウム

「国際感覚を身につけた世界に羽ばたける人材育成」という観点から、今回のプログラムは極めて有意義であったと思われます。モンゴル健康科学大学では今回のために「大学学生賞」を受賞あるいはノミネートされた医学生を選抜しており、本学の学生達はその英語力、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の高さなど、発展途上国であるモンゴルの中に自分達よりも優れた能力の多くの人材がいることを知る素晴らしい機会を得ることができました。また、学生達は我々教官やモンゴルの教官とのアットホームな意見交換を通じ、"徳島という地域に固執するのではなく、知識、技術、人間性を高めるために世界に飛翔することが重要である"ことを脳裏に刻むことができたと感じています。

サマーハウス親睦会

この交流プログラムは、プログラム自体の拡充や医学生達の意識改革によって、医学部の枠を超えた徳島大学とモンゴル健康科学大学の発展に大きく寄与できると確信しています。

学生の交流について

医学部医学科4年
河南 真吾 かわみなみ しんご

モンゴル健康科学大学(HSUM)で行われた学生間のワークショップでは、私たちが現在受けているチュートリアル教育をはじめ、徳島大学医学部のカリキュラムや学生生活、研修医制度について紹介しました。その他にも日本における大学入試の様子や医療事情についてなど、各自が苦心して作成したプレゼンを発表したのですが、私たちにとって人前でポインター片手に語る経験なんて初めてです。しかもそれが英語での発表なので、自分の出番が済むまでは緊張で他の人の話が半分も聞こえていないのが正直なところでした。モンゴルの学生達もHSUMの行事や母国の文化を紹介してくれましたが、この国では女性の医師が男性の医師よりも多いという話が驚きでした。

私たちをもてなしてくれたモンゴルの学生たちは、顔立ちや服装、聞いている音楽なども私たち日本人とほとんど同じです。彼らは勤勉で誠実で、それでいてバカ騒ぎもできる明るい人たちで、学生寮やキャンプ地で過ごした共同生活は、一緒に食事をつくったり、夜遅くまで語ったり、はしゃいだり歌ったりと本当に楽しかったです。モンゴルの若い人たちの常識で驚いたことは、遊びといったらカラオケではなくディスコに行くこと、全員が馬に乗れることや馬糞のにおいを良い香りだと感じることでした。学生寮の中では、ネットや携帯を使いこなす学生たちが一方では洗濯物を洗面所で手洗いするのを日課にしていることにも不思議な感じがしました。

この研修に参加して得た一番大きなものは、将来モンゴルの医療をリードする医師になるだろう素晴らしい学生と強い友情が築けたことです。私はこの関係が永く続くよう彼らの役に立てる医師になりたいと感じるようになりました。来年はHSUMの学生が来日すると聞いていますが、今回のような学生同士の深い交流が行われ、お互いの進路によい刺激が与えられるプログラムになることを楽しみにしています。

学生交流シンポジウム

学生交流サマーキャンプ

Health Science University of Mongolia